

捜しに来た清次たちが、清姫を発見した時、姫は、振木のスギの樹の枝に……ポロポロの着物を纏って……放心したように坐っていた。

清次たちは、姫を、真砂の屋敷に連れ帰った。

清姫は「大丈夫だから……私は、もう……大丈夫だから……」

と繰り返して言っていたが……それだけに、清重は、心配でならず……一晩中、見張りを付けていたが……姫は、こっそり屋敷を抜け出し……次の日の朝、淵に浮いている姿で発見された……。

……いつものように、水浴に行つて足を滑らせただけなのかもしれない。……しかし、いくら川が増水しているとはいえ、水鳥のように泳ぎの巧みな清姫が、溺れるとは思えなかった。

延長六年（西暦928年）旧暦の8月23日……清姫……数え十三歳の幼い命であったという。

